

日韓印刷文化と印刷教育

国際印刷大学校学長、印刷教育研究会初代会長 木下 堯博

古代から日本と韓国との印刷及び関連分野の交流があり、世界最古の印刷物として韓国の「無垢浄光大陀羅尼經」(751年)がある。日本では法隆寺に現存する「百万塔陀羅尼經」(770年)は韓国、中国の影響を受けたものとも推定されている。

金属活字による印刷物「白雲和尚直指心体要節」(韓国では直指という)(1377年)は現存する最古の印刷物で、「グーテンベルグの42行聖書」(1447年)よりも古く、金属活字による印刷技術は東洋からヨーロッパに伝播したのとして、内外の研究者により、多数の研究が進められた。この直指は2001年にユネスコのMemory of the Worldに認定された。直指委員会では世界の各分野の記録保存に対し、直指賞を2年に一回贈呈するまでになった。韓国の伽耶山にある海印寺には八万大藏經(1251年)が所蔵されていて八万枚以上の木版が保管されている。グーテンベルグの印刷技術はイギリスのカクストン、ベルギーのプランタン家によりヨーロッパ全土に普及するにいたり、宗教や産業革命の基盤をなした。一方、日本ではグーテンベルグの印刷技術が天正少年使節団により、1591年熊本の天草に伝来し、印刷機械と活字一式から、天草学林で使用した多くの教材を多数印刷した。明治の初期、本木昌造による活字制作と印刷は日本の印刷文化の発展をもたらした。毎年9月3日長崎市の大光寺で本木昌造顕彰会の主催で法要(昨年は135回忌)がいとなまれている。今日の日本の印刷産業はデジタル化により、金属活字をデジタルフォントに変換し、デジタル印刷の一層の進展をもたらし、1991年の印刷産業の出荷額は約9兆円とピークに達した。その後、ITと電子化の台頭により、21世紀には印刷出荷額は減衰傾向にあり、2020年の出荷額は4兆円(低位)との推定もある。即ち、従来の紙に多数枚数を印刷するシステムの変換がせまられている。しかし、世界的にはアジアを中心として、印刷出荷額は増大傾向にあり、新しい知識社会における文化の多様性から電子書籍の拡大などでスマートフォンのメディア文化が生まれる可能性もあろう。

近年の日韓文化は衣食住に関する生活文化と漫画・アニメなどの商品文化があり、「韓流」により、日本文化に大きな影響を与え、印刷分野にも波及効果を及ぼしている。印刷産業は内需中心から積極的に外需も受注可能なビジネスモデルが必要となる。

日韓の印刷メディアの高等教育機関の設立は韓国では1978年釜山工業専門大学(釜慶大学校の前身)、韓国印刷学会は1982年と日本の東京高等工藝学校(千葉大学の前身)、日本印刷学会の設立1921年よりも約50年近く新しいため、産学協同により最新のシステムが導入され、印刷メディア系博士課程も充実していて、印刷文化を含めた研究も期待される。

世界の4大印刷展(4年のローテーション)のIPEX2010(バーミンガム市)、IGAS2011(東京都)、drupa2012(5月3日からデュセルドルフ市)、Print2013(シカゴ市)のうち、本年のIGAS2011期間中の9月17日に「日韓印刷文化シンポジウム」を開催し、印刷文化の発展が印刷産業の進展を計る重要なKey Pointになる主旨をまとめ、日韓印刷文化の拠点構想を内外に広くアピールし、若者のための日韓グローバル人材の育成など、このシンポジウムで展開の予定である。

(印刷教育研究会会報巻頭言 2010年12月12日記)